

内藤学文公顕彰会

傑人 岸田吟香

拳母より現る

森 泰通

令和五年度 総会記念講演記録

講師 生涯活躍部美術博物室 森 泰通 先生

傑人 岸田吟香

拳母より現る

内藤学文公顕彰会

講師のご紹介



森先生は、昭和四十年名古屋市のお生まれ、小学校三年から豊田市にお住まいになり、名古屋大学文学部考古学研究室を卒業、昭和六十二年に豊田市役所に就職されて一年間は社会教育課公民館係、平成十二～十五年財政課、それ以外は文化財課、郷土資料館に関わる仕事をされ、豊田市の歴史を調べたり、挙母祭りの由来を調べたり、祭りを見るとも大好きだそうです。

『新修豊田市史』原始部会執筆委員を務められ、令和二年刊行の通史編の古墳時代を執筆されております。専門は考古学でありますので、

多くの日本考古学の研究をされる傍ら、本日ご講演頂く「岸田吟香」の調査研究にも力を入れられています。吟香の応援団長を自任しておられ、そのPRのため各地を飛び回られているそうです。平成二十五年には、郷土資料館において特別展「明治の傑人岸田吟香」を開催されました。

まだまだ他にも多くの調査、研究をされておられます。機会があればご紹介させて戴きます。

今年から、豊田市生涯活躍部 美術・博物室長を務めておられます。著書には「明治の傑人岸田吟香」などがございます。

（会長 神谷勝二）

傑人 岸田吟香 拳母より現る

森 泰 通

目 次

講師のご紹介	1
はじめに	5
一 ○	7
若き日の葛藤	7
一 (一) 豊田市 (拳母藩) と吟香の関わり	7
一 (二) 吟香、江戸に現る	11
一 (三) 拳母藩と吟香	12
一 (四) 安政の大獄	14
一 (五) 拳母藩の儒官となる	16
一 (六) 脱藩	21
一 (七) 江戸の市中にて	22

二 幕末・明治の開化人として

25

(一) ヘボンとの出会い、『和英語林集成』の誕生

25

(二) 吟香が綴った日記と文章

31

(三) ジャーナリストとしての吟香

37

a. 『新聞紙』『海外新聞』

37

b. 『横浜新報もしほ草』

40

c. 渡航新聞のりあひばなし

44

d. 東京日日新聞

54

(四) 樂善堂とその広告戦略

54

三 吟香から生まれたもの、そして晩年

(一) 明治初期のジャーナリズムを支えた二人目の拳母藩士 斎木環（貴彦）

66

(二) 晩年の吟香と受け継がれしもの

71

(三) 「岸田吟香」とは

78

○ おわりに

80

あとがき

84

66

66

66

○ はじめに

みなさんこんにちは。生涯活躍部美術博物室の森と申します。私の本来の専門は考古学で、主に出土した土器などのモノを扱う学問です。ただ自分は、人間というか人の生き様というか、そこにあつた物語を見るのが大好きです。もう三〇年以上前になりますが、自分もまだ二〇代の若き青年だった平成四年に、豊田市郷土資料館で『挙母藩内藤家展』という特別展を、伊藤智子学芸員と共に担当させてもらいました。振り返ってみるとこのときの経験が、考古学しか分からなかつた自分の眼を大きく開かさせてくれたのだと思います。ここで挙母藩には本当に面白い人物がたくさんいるんだということを学ばせてもらいました。それは、挙母藩が熱心に教育に取り組んでいたからだと思うのですが、その中でもすば抜けて面白い人物がいる。それが本日お話をさせていただきます岸田吟香です。自分は吟香の研究者というにはおこがましいのですが、大好きなことにおけるては第一人者だと自負しております。

吟香は明治の時代には誰もが知る有名人だったのですが、次第に忘れられてしまった人です。東



岸田吟香肖像写真

京国立博物館にある重要文化財の麗子像を描いた岸田劉生の父親、と言つた方が分かりやすいかもしませんが、そんな表現をしたら吟香に叱られてしまう。それくらい桁外れな活躍をした人です。私は出身地である岡山県の久米郡美咲町や、津山市・岡山市などでお話をさせてもらつたこともあり、岡山では「岸田吟香を語り継ぐ会」などが活動を続けていて、吟香を大河ドラマにという声もあります。本日は若き日の吟香が過ごした挙母の地で、そして歴史ある内藤学文公顕彰会で、私の大好きな吟香の話をさせていたく時間をおいただきましたことに深く感謝申し上げます。

さて今から一〇年前、私が『挙母藩内



展覧会チラシ

『藤家展』で吟香と出会ってから約二〇年経つた平成二十五年に、豊田市郷土資料館では特別展『明治の傑人 岸田吟香』を開催しました。吟香という素晴らしく魅力的な人物がこの挙母にいた、ということを少しでも多くの人に知つて欲しい、その思いが通じたのか、全国から大勢の人達が見学に来てくださいました。チラシにある吟香は、明治期の画家・亀井至一が描いたもので、この時四三歳。身長一七六cm 体重九二kg という明治の時代では巨漢です。吟香はその姿のままの桁外れな行動力で、数々の偉業を成し遂げました。一日ではとても紹介しきれませんが、本日はその一部を、あわせて人間吟香の魅力を紹介したいと思います。

一・若き日の葛藤

(一) 豊田市（挙母藩）と

吟香の関わり

挙母藩内藤家二万石とよく言
いいますが、ざつくり言います
と、この挙母を中心とした三河
に一万石、離れた場所にある飛

挙母藩領地一覧表 宣延2年(1749)

三河国加茂郡 (11,323石余)	美作国久米北条郡 (5,052石余)	遠江国 (5,849石余)
挙母町(北町・本町・ 南町・東町・中町・神 明町・西町・竹生町)	坪井上村	上末本野村
梅坪村	坪井下村	下末本野村
四郷村	中北下村	上久野村
舞木村	南方一色村	中久野村
荒井村	中山手里村	下久野村
花木村	中山手奥村	別所村
越戸村	中坪和上口村	菅ヶ谷村
吉瀬間村	中坪和鶴村	谷川村
飛泉村	中坪和谷村	柏原町
下林村	東坪和村	柏原村
長興寺村	西坪和村	外之久保村
山室村	小山村	仁田村
下市場村		川崎町村
金谷村		堀之内村
今村		中村
土橋村の一部 (上・下浦巣山林)		青柳村
深見村		南原村
飯野村		
泊村		
田茂平村		
打越村(みよし市)		

※明治2年 美作国藤北郡に4,375石余追加された

1749年の挙母藩領一覧

び地として岡山県と静岡県に五千石ずつ、合わせて二万石を有していました。そのうち岡山県は美作国久米北条郡内の一二ヶ村、現在の美咲町や津山市的一部が該当します。

挙母藩の陣屋は坪井下村（現

・津山市）にありました。

吟香は今から一九〇年前の天保四年（一八三三）、現在の岡山県久米郡美咲町にあつた中坪和谷村という山あいの村で生まれました。天保生まれには数多くの偉人たちがいます。例えば吉田松



生家付近の現在の風景（岡山県美咲町）



上海で描いた故郷の風景



坪井陣屋跡の石碑
(岡山県津山市)

陰は三つ年上、木戸孝允は同じ年、福沢諭吉・岩崎弥太郎・近藤勇が一つ年下、坂本龍馬二つ年下、高杉晋作が六つ年下です。ただし吟香は武士の生まれではない。そこから彼の唯一無二な生き方が生まれてくることを意識して、これからのお話を聞いていただけるとありがたいです。

吟香が生まれ育った家は、風景写真の中の石碑が立つところにかつてあって、昭和初期の取り壊し前の写真が残されています。吟香は四歳で唐詩選を暗唱し、神童と呼ばれたそうです。後に吟香が三四歳の時に上海で綴つた呉淞日記に描いたふるさとの絵があります。さきほどの風景写真とならべて



吟香の生家（昭和初期）

パワー・ポイントを作りながら、私もあらためて気がついたのですが、山の稜線や内容・特徴が本当によく描けている。息子劉生に受け継がれた才能だと思います。

弘化二年（一八四五）、一二歳の時に吟香は坪井下村の安藤善一の学僕となります。善一は挙母藩領内の取締大庄屋で、吟香の評判を聞きつけ、吟香の父を説得して、勉強をさせるために坪井に連れてきたのです。

安藤家は今も出雲街道沿いに、歴史あるたたずまいを残しています。そして、弘化四年、一四歳になると、さらなる学問修業のために、松平家一〇万石の城下町である津山に出来ます。吟香は約五年間、ここで幅広い人脈をつくりながら、漢学などの学問や剣術修行に励みました。



現在の安藤家（岡山県津山市）

(二) 吟香、江戸に現る

嘉永五年（一八五二）一九歳、もしくはその翌年に、吟香は学問修業のため、江戸に向かいました。嘉永六年にはペリーが浦賀に来航し、日本という国がいよいよ大きな波に飲み込まれていきます。嘉永七年、吟香二歳の時の手紙には、「大坂へ賊船入港致候由…」と、大阪の天保山沖に現れたプチャーチン率いるロシアのデイアナ号のことが記され、「江都は軍学頗ニ流行し、書生も皆兵を談し申候而…」と混乱する江戸の様子を伝えています。また、同年十一月に弟の熊蔵に宛てた手紙には「遠方に而つらひとハ申ながら、作州之屋敷ニ居申候得ば、大抵みな知り人ニ而力ニも相成、其上備前屋敷もつい隣ニ而人の習俗、言葉、共ニ内ニ居ると相違無之候」とあり、吟香は津山藩士ではないものの、学問修業のために藩邸に住み込む、書生のような立場であつたかと思われます。また、「三州挙母之御屋敷ハ少し間有之候故、未参り不申」ともあり、挙母藩にはまだ挨拶には行けていないようです。

幕末といえは尊王攘夷派の志士たちが続々と生まれ活動した時代です。江戸で学問を究めていた吟香も例に漏れず、特に藤森弘庵の塾で尊皇攘夷思想をもつ志士たちと交流を深めていきました。桂小五郎のちの木戸孝允は塾の一つ後輩で、のちのちまで吟香のことを先生と呼んだと伝えられています。その他にも、梅田雲浜・うめだ うんひん・頼らい

三樹三郎・梁川星巖など、尊
皇攘夷思想をもつ人物たちと
盛んに交わりました。

(三) 挙母藩と吟香

ここで挙母藩との関わりを見ておきましょう。挙母藩士で初代西加茂郡長となつた田中正幅が記した『挙母藩史』(明治二十五年(一八九二)草稿)には、「安政三年三月、領分作州中併和村庄屋秀次郎男達藏、學問熱心ニ付、被召出、中小姓席席扶持方貳口ヲ賜ヒ、御目見被許、後給人ニ進ミ儒者ニ列ス、尋テ藩ヲ去ル 達藏ハ岸田氏、太郎、又太郎左衛門、後銀治ト改ム、墨江ト号ス、頗ル學識アリ、乃チ今ノ岸田吟香ナリ」とあります。安政三年(一八五六)は吟香二三歳、尊王攘夷派の志士たちが徹底的に弾圧された安政の大獄の二年前にあたります。吟香が挙母藩士であったことを直接、確実に確認するためには、禄高・



「両表御家中分限帳」

役職などを記した帳面である分限帳の存在が一番なのですが、今に残る分限帳は極めて限られていて、これまで吟香の名前は確認できていませんでした。ところが、特別展の準備中に上挙母の神谷早苗さんが「これ吟香のことじやないかや」と、ご自身が入手された分限帳「両表御家中分限帳」の中に、「吟香の名前らしき」ものがあることを教えてくださいました。「高弐口」そして「辰蔵」の文字の横に「太郎」と小さく書き足されていて、「安政三年三月 日 学問修行被仰付 月棒弐口被下御直札席並御取扱被仰付」との添え書きがある。これを見せてもらつたとき、私は飛びはねて喜びました。吟香の名前は幼名が辰太郎、のち達蔵。大正期に渡辺善次が記した『七州城沿革小史』に「内藤侯ニ仕フルニ及ヒ太郎又太郎左衛門ト改ム」とあり、吟香の呉淞うすん日記（慶応二年十二月二十九日）にも、「そののちにだいみようのところへかかへられて、そのだいみようのむすこに辰というのがあるから、辰という字をとりのけてきしたのたろうとよびし」とあるんですね。すなわち、辰蔵から辰太郎、さらに太郎に改名されているらしい。この分限帳に岸田とは記されていないのだけれど、当初の「辰蔵」の文字に「太郎」と書き加えられていて、名前の変遷が一致している。そして、「安政三年」「弐口」などの記述が『挙母藩史』と一致するので、これは吟香のことと考へて間違いないだろうと。つまり、この分限

帳は、吟香が挙母藩史であつたことを直接的に伝える、現状唯一の大変貴重な資料なのです。吟香は安政二年の大地震の後に持病の脚気が悪化して一旦故郷に帰るのですが、おそらくその後に挙母藩が、江戸で目覚ましい活躍をした吟香に声をかけたものと思います。ただし、吟香は藩邸に詰めているような立場ではなく、挙母藩が学問修業の支援・スポンサーになるような形をとつてていたのでしよう。

いずれにしましても、田中正幅『挙母藩史』の最後の文章「すなわち今の岸田吟香なり」という言葉には、「あのときの岸田太郎が、今やなんと、あの岸田吟香なんだぞ」という大きな驚きが含まれているように読みます。

(四)

安政の大獄

安政五年（一八五八）九月、梅田雲浜逮捕に始まる安政の大獄が始まります。ときの大老井伊直弼が尊王攘夷派を徹底的に弾圧し、吉田松陰・頼三樹三郎・橋本佐内らが処刑されました。滋賀県の彦根城博物館に行くと、幕府の役人が取り調べをした調書（重要文化財）が残っています。大垣の漢詩人であり勤王家であつた梁川星巖が受け取った手紙も調べ上げられていて、その中に「江戸岸田太郎」すなわち吟香が出した手紙も書き写されています。この中で吟香は、日米修好通商条約の調

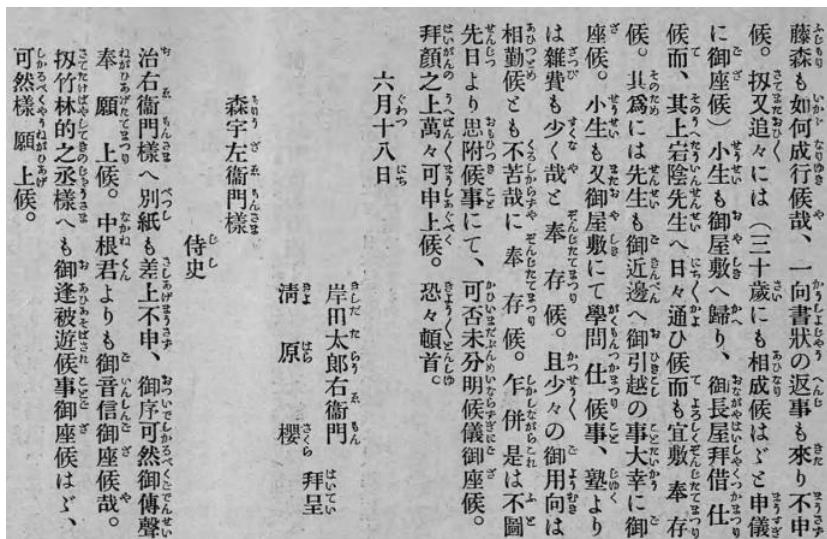
印について「いふもけがらはし」、孝明天皇が反対の姿勢をみせていることを「ありがたきみことのり」と書いています。この手紙は、安政の大獄が始まるわずか二ヶ月前のものなんですね。「関東には国家のことを憂うものが一人もいないのか」と嘆き、尊王攘夷派の志士としての姿を明確に示しています。実はこの手紙には、頼三樹三郎の取り調べに当たった幕府の役人が書いた下紙、つまり付箋のようなものがあり、「頼三樹三郎は吟香のことを知人でなく身分も知らないと言っている」と記されています。なんだか最近のSNSの閻バイトみたいですが、そんなはずはありません。三樹三郎はシラを切ってくれたんですね。おかげで吟香は虎口を脱して、のちに明治の傑人となつていくことができたわけです。そんなことを知つてか知らずか、吟香は後の慶応三年（一八六七）の日記にこんな風に書いています。「京のいへごともうめだもらひも月性も三なしんだ」：だからいきてゐるうちにばやくあふて酒でものんでもたのしまねばつまらない」と。「いへさと」は伊勢松坂の家里松嶋か次郎、「うめだ」は梅田雲浜、「らい」はシラを切ってくれた頼三樹三郎、「月性」は吉田松陰らと親交があつた勤王僧。尊王攘夷のために共に闘つた仲間たちに哀惜の念を示しているのです。

吟香は安政の大獄に前後して、一度挙母藩から離れたようです。藩からの支援や関係を絶つたのか、あるいは絶たれたのではないかと思います。三代続けて彦根の井伊家から養子を迎えて藩主としていた挙母藩にとつては、井伊直弼が断行した安政の大獄の世の中において、尊王攘夷派として立ち回っていた吟香はどう考へても具合が悪いですね。このとき吟香は、上州伊香保に身を隠したとされます。

この頃の吟香について、最近の研究で分かってきたことがあります。吟香は明治三十八年六月に亡くなりますが、有名人の手紙を掲載した『手紙雑誌』の明治三十八年七月号に、笠井紀一郎なる人物が吟香の書簡を投稿しているんですね。私はこの資料のことを全然知りませんでしたが、令和四年に刊行された山本巖さんの『岸田吟香傳』という本に掲載されています。この笠井紀一郎さんについて私は知識がありませんが、お名前から察するに市政功労者にもなつておられる笠井卯三郎さんのご先祖でしょうか。どなたかご存じの方がおられましたら、ぜひ教えてください。

話を戻しますが、この手紙は吟香が挙母藩の江戸家老であった森宇左衛門に宛てたものです。宇左衛門よりも精齋と言った方がご存じの方が多いと思いますが、森

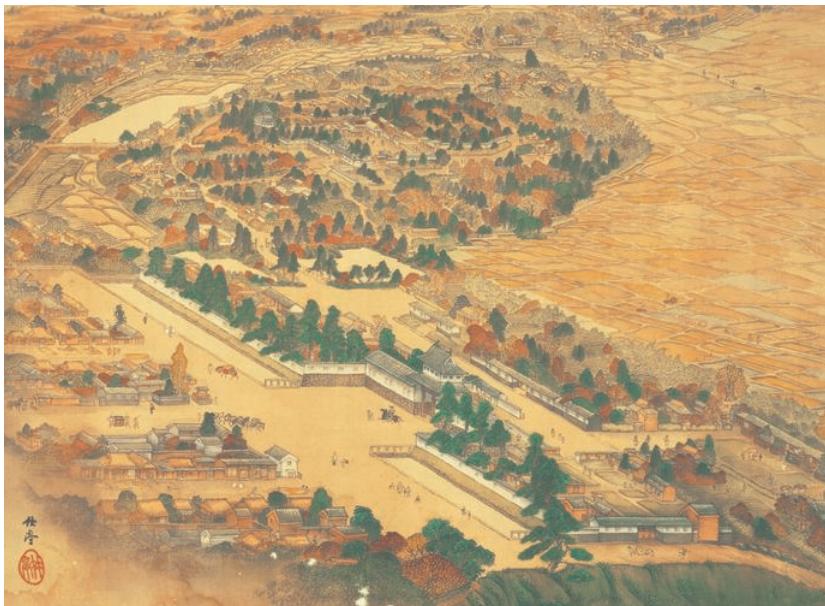
精齋は儒学に精通した非常に優れた人物で、内藤政優公にも重用された挙母藩の重臣です。この手紙の日付、おそらく安政七年（一八六〇）の六月十八日は、実際には万延元年に改元されているのですが、この年の三月三日には桜田門外の変が起きて、安政の大獄で荒れた江戸のまちは落ち着きを取り戻しつつありました。吟香は森精齋を尊敬しつつも親しいやりとりをしていて、学問をしたいという気持ちがよく伝わってくる内容です。また、中根謙享や竹村的之丞（悔齋の息子）といつた挙母藩の儒者とも懇意だつたことが分かれます。この当時の吟香の立ち位置が分かるこうした新資料がまだまだ見つ



『手紙雑誌』に掲載された吟香手紙の翻刻（部分）

かるのはうれしいことですね。

吟香は、文久元年（一八六一）三月に儒官、つまり儒学を教える先生として挙母藩に招かれます。この時、吟香二八歳。十月までは挙母で起居していたようです。ときの挙母藩主は七代文成公。まだ六歳で、最後の挙母藩主となります。渡辺善次の『七州城沿革小史』には、「万延二年辛酉三月三日内藤侯亦先生カ非凡ノ學識ナルヲ賞シ更ニ其祿秩ヲ増加シ儒官ニ列ス」とあります。この本の中で渡辺善次は、およそ二〇頁にわたり吟香のことを書き記しています。吟香が七州城に登城し、列座した



「七州城図」(市指定文化財)

藩士たちの前で流れるような講義を行つたという、亡父から夜話で聞いた話などを伸び伸びと語り、その行動力を「信スル所ヲ決行スルコト洪水ノ長堤ヲ決潰スル力如ク」と評しています。おそらくものすごい行動力だったのでしょうか。

こちらは牧野敏太郎が描いた「七州城図」です。吟香が講義をしたであろう藩校崇化館や、本日おそらく皆さんもご覧になられた七州城の隅櫓が描かれています。吟香はここで講義をしたり、この辺りを闊歩したりしていたわけです。

吟香が江戸に出る前に学んでいた津山の画人であり、おそらく津山藩の情報収集役をも担つた塘雲田、彼は吟香の生涯の友であります。塘雲田、塘雲田の津山の画人井上雲樵に宛てた文久元年十一月二十五日付の手紙が残されています。吟香の研究者である津山市の竹内佑宣さんが一〇数年前



藩校崇化館の額と「学問・射的御見之図」



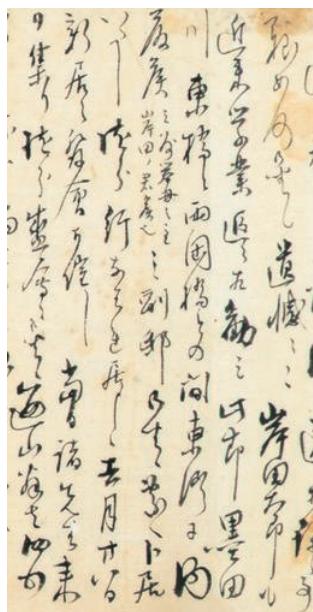
七州城隅櫓

に、ゴミ同然となつていた文書の東から見つけ出したものです。これを読むと、「岸田太郎」すなわち吟香は、文久元年（一八六一）十月二十八日に挙母から江戸の挙母藩下屋敷に居を移しています。つまり、江戸詰となつたのですね。

「墨田川東（吾妻）橋と両国橋との間、東側に内藤侯（三州挙母之主・岸田ノ君侯也）之副邸御座候処へト居いたし」がそのことを示

艱め敷御座候、遺憾々々。岸田大郎も
近來学業追々相勧ミ、此節墨田
川東橋と両国橋との間、東側に内
藤侯（三州挙母之主岸田ノ君侯也）之副邸御座候處へト居
いたし隨分行なわれ居申候。去月廿八日
新居之發會相催し、當日諸先生來
り集り、隨分盛會ニ御座候。（以下略）

しています。現在の景観でいうと、ライオン本社ビル右側の隅田川に面した場所（墨田区本所一丁目）に挙母藩の江戸下屋敷がありました。つまり、吟香が挙母にいたのは、文久元年三月以降のどこから、十月の間であつた可能性が高いことになります。



塘雲田手紙と翻刻（部分）

(六) 脱藩

ところが吟香が後に記した慶応二年（一八六六）十一月二十一日の吳淞日記を読んでみると、「十年ばかりまへにふと大名につかまへられて、五六年の間さむらひのなかまにはいつて、いやでこたへられないからいろいろとしてやうやくの事でやしきをにげだして、かたなをうツちやツてから、もうつめくそほどもさむらひになるりやうけんはないが、夢にハたびたび刀をさしてゐる處を見るが、わからないもんだ。實に心にのぞまない事を見るからおかしい。」とあります。ほかにも「あたまをさ



拳母藩下屋敷跡地の遠景（東京都墨田区）

げたりひざをおることはいやだ」などとも記しています。桁外れな行動力で未来を切り開こうとする吟香に、身分制度やしきたりの厳しい武家社会は何とも窮屈だったのかもしれません。文久元年（一八六一）十月に江戸詰となつた吟香は、その翌年の正月にはすでに藩邸に居ないことが分かつていますので、十二月頃には脱藩したと考えています。

脱藩した翌年に塘雲田に宛てた手紙には、「今日も参りマクロト大根を烹て大醉可笑事ニ候。只此様之時勢ニ候間世を玩弄天下を睥睨致候て暮シ候事面白と奉存候、追々時分致り候ハ、又」とあります。当時のマグロは鮮度を保つことが難しく、庶民が食べる中でも最下層の魚です。そのマグロと大根を煮て大いに酔っ払つて、世の中を見下ろして、天下をにらんで暮らすこともまた面白いもんだと。幕末の尊王攘夷の志士として、身を尽くして自ら立ち回る立場から、一歩離れて横目で見つめる吟香がここにいます。なんだか脱藩して吹つ切れた、というか糸が切れたような感じがしませんか。脱藩後の吟香は、江戸の町中に身を潜めていきます。

(七)

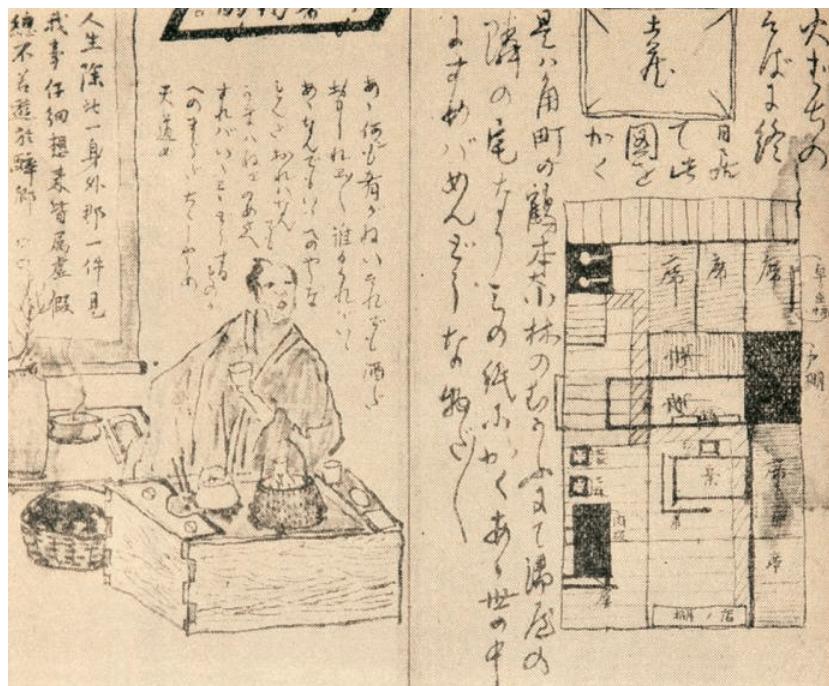
江戸の市中にて

また少し日記を見てみましょう。慶応二年（一八六六）十二月二十九日の吳淞日記。^{うすん}

「四五五年まへにそのだいミニやうのやしきをもにげだして、きま、にくらす方が一生のとくとおもひついて、それからまゝよのぎんと名をかへたが、……やしきを出てからあんまりあそびすぎて、かみも何もなく成てしまつて、深川のかりたくへ奉公にはいツた時、そのだんな様が名ハなんといふときいたから、口から出まかせに銀次と申しますといふたのがはじめなり。扱そのほうばいのものが銀公ぎんこうといふから、そのぎんこうで今までゐるなり」と。「ままよ」は吟香がよく使う言葉で、「えゝい、どうにでもなれ」みたいな言葉ですが、かみ（金）が無くなつてかりたく（臨時の遊郭）へ奉公に入つたようです。でまかせに使つた「銀次」という名を、同じ遊郭の同僚たちが「銀公」「ぎんこう」と言うのでそのままにしたと、自分の名前の由来を記しています。

こちらは自分の姿を描いた元治二年（一八六五）の乙丑日記です。脱藩から三年を経た吟香は三十一歳になり、まだほつそりしていますが、吉原の角町で湯屋の三助、つまり風呂屋の釜焚き・あかすり・肩もみなどをやつていたようです。京都ではこの前年に池田屋事件や禁門の変などが起きて、志士たちが決死の覚悟で鬪つている最中ですが、その頃の吟香はどんな様子だったかというと「火ばちのそばに終日居て、此図をかく。是ハ角町の鶴本大小林のむかふにて、湯屋の隣の宅なり。ミニ

の紙にかく。あ、世の中に
すめばめんどうな物だノ
＼「あ、何ンも肴がねい、
それでも酒だ。おもしれ工
く。誰かくればい、あ、
なんでもい、へのやうな
もんだ。おれハなんでもか
まハね工。のめさへすれば
い、。工、どうするものか。
へのまらだ。ちくしやうめ。
天道め」「正月終。あ、つま
らなく一月つぶしてしまつ
た」という具合です。ここ
に見えるのは「ぐづぐづ」
「ぐづぐづ」の吟香で、彼
の鬱屈した叫びが聞こえて



乙丑日記（元治2年1月30日）

くるようです。この後、吟香が明治の傑人になるとは、正直到底思えませんね。

脱藩後の吟香は「左官の助手」「八百屋の荷担ぎ」「湯屋の三助」「妓楼の主人」など、様々な職業を江戸の市中で経験しました。つまり、武士を捨て、江戸の町中で三年半を暮らすなかで、三〇歳までに士農工商の全ての職に就いたことになります。これこそが、後に傑人岸田吟香を生み出すバックボーンになったのです。

一 幕末・明治の開化人として

(一) ヘボンとの出会い、『和英語林集成』の誕生

吟香の人生を変える大きな出会いがやってきます。吟香は眼を病んでしまうんですね。大好きな本が読めなくなってしまう。焦った吟香は、元治元年（一八六四）五月、三一歳のときにアメリカの名医として評判の高かつたヘボンを、横浜居留地に訪ねます。この絵葉書にある三角屋根の建物です。ち



ヘボンの肖像写真

なみにこの年の六月には、京都で池田屋事件が起きています。ヘボンはキリスト教の布教を目的に来日していて、聖書の日本語訳をつくるために和英辞書の編纂をしていましたね。そのため、有能な助手を探し求めていた。そこに現れた吟香は漢学・和学に通じ、武士のみならず町人・百姓の言葉にも通じていて、まさにうつてつけの人物でした。吟香は横浜のヘボン邸に移り住んで、治療や辞書の編集を手伝うことになりました。そして、慶応二年（一八六六）九月には原稿が完成して、活版印刷ができる上海にヘボンと共に向かったのです。上海での様子を、うーすん吳淞日記から抜粋してみましょう。

◇慶応三年（一八六七）三月二十三日
「けふへばん 對譯字書にあたらしく名をつけ



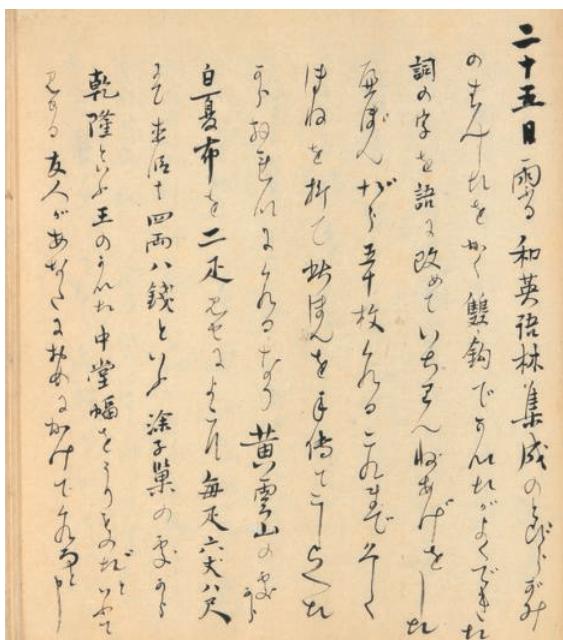
横浜居留地のヘボン邸

てくだされ ほんのとびらがみ
にかくやうによい名をといふか
ら 和英語林集成とつける」

◇慶応三年三月二十五日

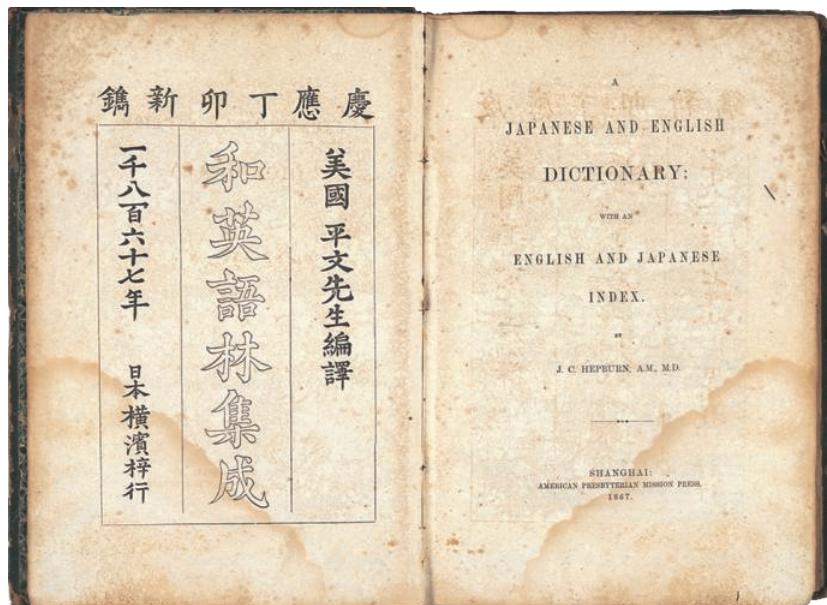
「雨ふる 和英語林集成のとび
らがみのはんしたをかく 雙鈎
でかいたがよくできた 詞の
字を語に改めていちりんねあげ
をした へぼんだら五十枚くれ
る これまで久しくほねを折て
此ほんを手伝てこしらえたからおれいにくれるなり」

『和英語林集成』、日本語と英語の言葉が林のよう立並ぶ。良い書名ですね。「い
ちりんねあげをした」と洒落を効かせてますが、吟香はヘボンからお札に五〇ド
ルもらつたようです。そうしてできたのが、この『和英語林集成』初版。慶応三年



吳淞日記

(一八六七) の刊行です。左側には日記にあるように、吟香が縁取りして書いた「和英語林集成」という題字が中央にあり、その右側には「アメリカ國へボン先生編集」とある。しかし、吟香の名前はどうにも出でません。そう思つて中を開いて「To」の欄を見つめてみると、「Na wa Ginko to iu, his name is called Ginko」と、ちゃんと吟香の名前が例文に使用されていいます。その下の「お富」の名前の例文もとても面白いですね。当時の日本の言葉が生き生きとよみがえつてくる感じがします。今の私たちから見ると、『和英語



『和英語林集成』初版

林集成』は単なる辞書ではなく、江戸時代の「話しことば」や「書きことば」を集大成した万華鏡のようなものであつて、当時の日本語を知りうる貴重な手がかりなのです。例えば「負色」という言葉。私たちは今、「敗色」濃厚と言つたりしますが、当時の言葉を探してみますと、例えば慶応二年一月に交わされた薩長同盟の六カ条、これは坂本龍馬が裏書きしたことで有名ですが、その一つに「万一負色にこれ有り候」とも一年や半年に決て壊滅致し候と申事はこれ無き事に付、其間には必尽力の次第屹度これ有り候との事」。つまり、万が一、長州藩が負けそうな場合でも、一年や半

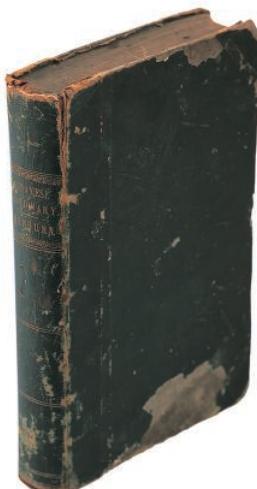
ga nayai, when there is a full number of hands work is done rapidly.

To, ト, 戸, *n.* A door. — *wo akeru*, to open a door. — *wo tateru*, or — *wo shimeru*, to shut a door.

To, ト, 砥, *n.* A whetstone.

To, ト, 輿, *conj.* And, that: used to mark a quotation, or to indicate some thing said, or thought. *Ame to tszchi*, heaven and earth. *Szmi to fude to kami to wo motekoi*, bring the ink, pencil and paper. *Mō nai to mōshimash'ta*, he said there was no more. *Na wa Ginko to iu*, his name is called Ginko. *Muszme no na wo O Tomi to tszketu*, they called the girl's name *O Tomi*. *Moku-zō wo kami to szru*, he made a wooden image his god. *Tatakawan to yōi wo szru*, to make preparations for war, (lit. "I will go to war" (thinking) he made preparations). *Kore wa nan to iu mono*, what do you call this thing? *H'to ga kuru to nigeru*, when, or as soon as any body comes, it runs away. *To wo akeru to*

『和英語林集成』の内容



年で壊滅するようなことはないだろうから、その間は必ず長州藩を助ける為に尽力する、というのがある。第二次長州征伐が迫る長州藩を、薩摩藩が全力を挙げて援護することを約束する内容となっています。そのほかにも、「勝ち負け」が「負勝」と記されたりしています。面白いですね。この辞書は洋行する人や貿易商人に大変好評となり、その後も版を重ねて、第三版で採用されたローマ字の記述方法が、「くボン式ローマ字」となるわけです。

吟香はほかに簡単な辞書も作っています。『異人言葉』は便利な单語帳で、「帝」が「エムピロル」、「女王」が「クイン」、「綱」が「ロップ」といった具合です。また、『英語手引草』は会話集のようなもので、「私は昨日入港いたしました」は「アイ・ケイム・インツー・ホルト・イエスティルデー」つまり「I came into port yesterday」、「あなたの国はいづくでござる」は「ワットイス・ユア・カンツリー」やなねち「What is your

MAKE-IRO, マケイロ, 負色, The appearance of defeat, signs of giving way. <i>Teki no ikusa — ni natta</i> , the army of the enemy showed signs of defeat.
MAKEJI-DAMASHII, マケジダマシヒ, 不負魂, <i>n.</i> A person of an unyielding spirit.
MAKE-KACHI, マケカチ, 負勝, <i>n.</i> Lose and win. <i>Mada — wa wakaranu</i> , do not yet know which will be victorious.
Syn. SHŌBU.
MAKE-OSHIMI, マケオシミ, 負惜, <i>n.</i>

『和英語林集成』の内容

country」とあります。いずれの表紙にもある「ケースアリム」は吟香のペンネームのようなもので、吟香は、一般の人に分かりやすい辞書も手がけていたことが分かります。

(二) 吟香が綴った日記と文章

ここまで、吟香が記した日記についてもたびたび紹介してきましたが、ここでは慶応二～三年に上海で記した『呉淞日記』について触れておきましょう。吟香には自伝がありませんが、幸いにも日記がいくつか伝えられています。そして吟香の魅力は、日記の中に詰まっているといつても過言ではありません。呉淞（うーすん・



『英語手引草』

『異人言葉』



『英語手引草』

（ごしょう）は、吟香がヘボンと共に和英語林集成を印刷するため滯在していた中国上海の地名です。『呉淞日記』は本来は6冊あつたとされますが、現在確認できるのは3冊のみで、岡山県美咲町の岸田吟香記念館に寄託されています。

そもそも当時の知識人の日記というか文章は漢文調なんですね。例えば勝海舟の日記を読んでみますと、「たとへ死すとも、また泉下に愧る處無き而已」つまり、「もし死んだとしても羞じるところはないさ」と。何とも固い。吟香も学問を積み、挙母藩の儒官をやつていたほどなので、当然こうした文章にも精通しているのですが、話し言葉の「口語体」でのびのびと語っている。

なお、展示図録では吟香の日記のことを、「日記の魅力は、現代のブログなどとは異なり、他人に読まれることを気にせず、胸のうちを自由に語るところ



『呉淞日記』(個人蔵)

ろにある」と記しましたが、残念ながら実はこれが大間違い。吟香は下書きの日記を別にもつていて、それを編集・清書したもののが『呉淞日記』ということに後になつて気づきました。それも、人に見てもらうことを前提としていて、「からつと」すなわち中国のお土産と記しています。

日常の話し言葉に近い口語体を用いた文章は「言文一致」と言われ、現代の私たちにとつては当たり前ですが、幕末では考えも及ばなかつた。「言文一致」は明治二十年、二葉亭四迷の『浮雲』が有名ですが、吟香の文章はそれより一〇年以上も前の幕末なんですね。近年では吟香の日記は、言文一致の萌芽として評価されることが多くなつてきました。例えばここにお示しした『近代の文章』という本



『近代の文章』

の冒頭を飾っているのは、まさに吟香の吳淞日記（うすんじ）なのです。古文書の苦手な私は楽しく読める。少しここで、その内容を紹介してみましょう。長くなるのでかなり端折つて読みます。

◇慶応二年十一月七日

「日本の学者先生たちが、ほんをこしらへるに四角な字でこしらへるが、どういふりやうけんでほねををつてあんなむづかしい事をした物かわからねエ。……なぜといつてミなせエ、書物をつくる事ハ、ミな世の人によませて、りこうにならせるか、おもしろがらせるとかの為にする事なり。むづかしい漢文でかいた日にハだれにで



『吳淞日記』慶応三年

もハよめねエ。支那人か漢学者かでなければよめねエ。さうして見ると学者のこしらへたほんハむだほんなり。：：世間に学者よりハしろうとの方が多いから、しきうとにハさつぱりちんぶんかんぶんなり。だからおいらハもしほんをこしらへれば、四角なもじでハか、ない」

吟香の江戸つ子の「べらんめえ調」が面白いですよね。まるで吟香がすぐそこにいて、こちらに向かつて話しかけられているような気分になつてきます。

◇慶応二年十二月二十四日

「あ、なんだか雨が降つていんきなでんきだ。ねてほんでもよまうか。けふのやうな日にハゆどうふに、どぜうなべか、なにかうまいもので、くだらねエじやうだんでもいつて四、五人集ツて酒でものむほうがからにゐるよりかよさうだ。こゝにみてハからおもしろくねエ。早ク日本へかへつて上野へいつて格さんとみさん等と一盃のみたいもんだ」

ヘボン夫妻はおそらく静かにクリスマスイブを祝つていたと思います。吟香は退屈で、きっとやさぐれていたのでしょうか。「一盃」には「パイイチ」というフリガナが振られていることも大変面白いです。

◇慶応二年十一月二十六日

「せつぶんへいつかしらぬが鬼がわらふとも、まゝよの吟香、来年のくれハどこで
くらすかwakarimasen」

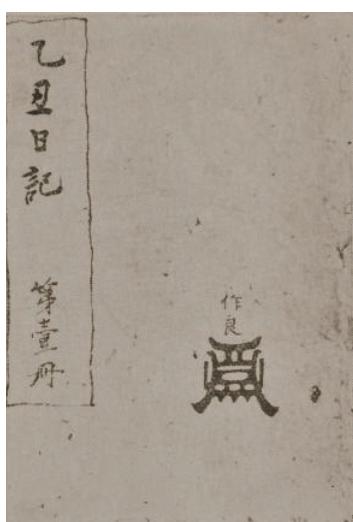
◇慶応三年三月二十七日

「ことし日本へかへツたらなんぞよい書物をあみだしたいとおもひます……先ツ日本の歴史それから萬国の地理書の類それから字書などひらかな書にして 日本の町人百姓でも職人でもをりすけ雲助でもよめるやうにこしらへるつもりなり」

次は別の日記で、私の大好きなフレーズです。何^ジとも「ままよ」の心意氣で考え行動する吟香の人生観が伝わってきます。

◆『乙丑日記』元治二年一月二十一日

「海が深いか、げたのあしあとが深いか、
ふじの山か高いか、ありのつき山かたか
いか、といふに、いつれもたかくもひく、



『乙丑日記』

もなし。ぶよがながいきをするか、人がいのちがみしかいか、といふに、いつれも
ながくもみじかくもなし。あ、なんでもよい／＼

本当に面白いですよねえ。日記だけでたぶん一日お話しできるのですが、きりが
なくなるので、この辺りでやめておきましょう。

(三) ジャーナリストとしての吟香

さて、吟香の一生を通じてみた場合、大きな柱の一つがジャーナリスト・新聞記
者ということになると思います。吟香が繰り返し述べていた「わかりやすい文章で
人々に伝える」。まさにそれを
体現したものですね。

a. 『新聞紙』『海外新聞』

吟香は横浜でヘボンにジョ
セフ・ヒコを紹介してもら
います。ヒコは乗っていた船が
大嵐で流され、アメリカ船に



ジョセフ・ヒコ

救われて、やがてアメリカ市民権を得る。そして通訳として九年ぶりに日本に帰国していたんですね。そして、吟香はヒコから「アメリカにはその日の出来事を記事にして知らせるニュース・ペーパーなるもの、すなわち新聞がある」ということを教えられる。当時の日本では、事件や災害のあつたときだけ出回る「かわら版」があるのみでした。二人は、日本でも新聞を出そうと意気投合する。そして発行されたのが『新聞紙』のちの『海外新聞』、日本初の民間新聞です。幕末の新聞は、あとで紹

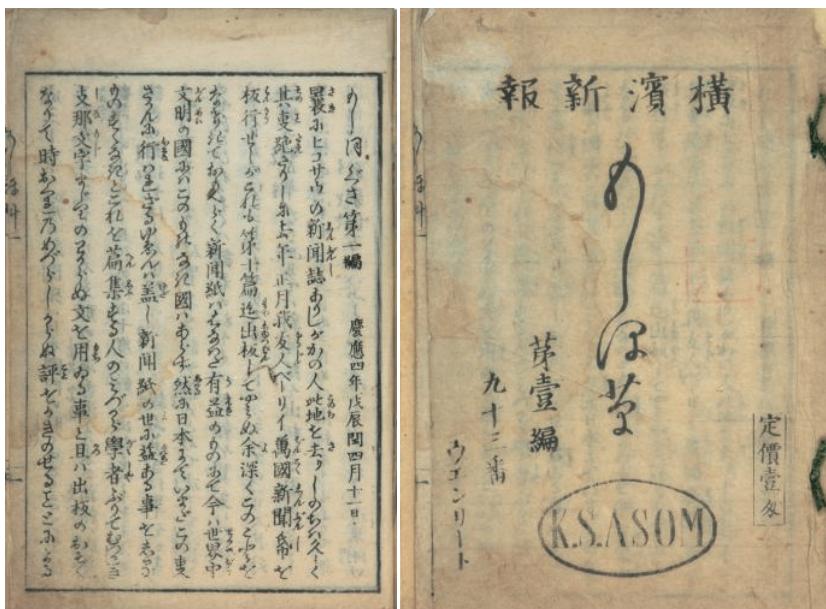


ジョセフ・ヒコ居宅跡（神奈川県横浜市）

介するように小冊子の体裁です。新聞作成の流れとしては、横浜に定期的に入港する海外の船から新聞を入手、ヒコが要点を語り、吟香がかな交じりの文章にして、本間が和紙に書写するというものでした。この時、吟香三一歳、ヒコ二六歳、本間二一歳。若き三人がメディアの新たな歴史を切り拓いたのです。この新聞は、各国の出来事や生糸・木綿等の相場などが記されるとともに、彼らが取材したこと、考えたことも記述されていて、吟香は日本初の新聞記者・ジャーナリストであつたと言つても良いと思います。慶応元年（一八六五）の『海外新聞』第二号には、「童子之輩にも読なんことを欲すれハ」と書かれていて、ヒコや吟香の思ひが良く伝わってきます。しかし、『海外新聞』は、ヒコが尊王攘夷派の志士たちに命を狙われる存在であつたこと、一部が五〇〇文、調べてみると当時のうな重が三〇〇文なので、高額ゆえにほとんど売れませんでした。この時点では、新聞は未だ社会に受け入れられなかつた。しかし、新しく聞き知つた出来事、すなわちニュースを定期的に伝える新聞は、まさに新たなメディアとして記念すべき第一歩を踏み出したと言えるでしょう。『海外新聞』は先にお話ししました吟香の上海行きとほぼ時を同じくして廃刊となりました。吟香が果たしていた役割がいかに大きなものであつたかがよく分かります。

b. 『横浜新報もしほ草』

慶応三年（一八六七）五月、
ヘボンとともに帰国したとき江
戸幕府は崩壊寸前。みな情報が
知りたくて仕方ない。江戸はど
うなつてしまふんだ、自分たち
はどうなつてしまふんだと。そ
んな中、慶応四年には一〇を越
える新聞が刊行されました。「新
聞」すなわち「ニュース」に対
する人々の姿勢や需要が大きく
変化したのです。その中にはも
ちろん吟香もいました。吟香は、
『横浜新報もしほ草』という新
聞の発刊に関わります。半紙四
つ折りで一〇数ページ、木版刷



『横浜新報もしほ草』第一編

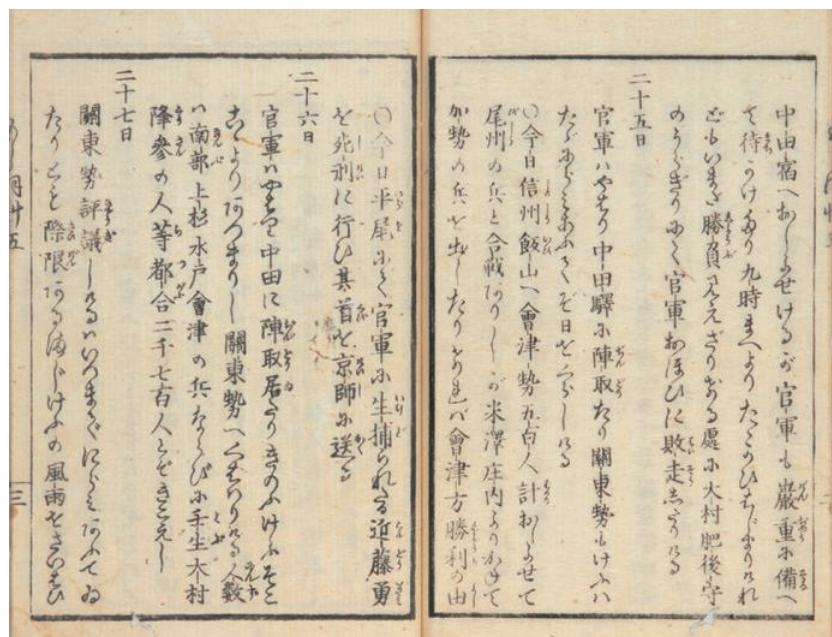
りの小冊子です。表紙には、横浜居留地93番に住むアメリカ人ヴァン・リードの名前があるのみ。つまり、外国人のもつ治外法権で原稿を書くことができるのです。しかし、表紙には赤い印が押されていて、よく見えてみると「Ginji Kicida」と読める。ヴァン・リードを隠れ蓑にして、つまり治外法権という傘のもとで、筆を振るっていたのは実は吟香なのです。举母藩を脱藩して以降、吟香は身を隠すのが慣わしなんですね。今から回覧します『横浜新報もしほ草』はおよそ一五〇年前のものです



『横浜新報もしほ草』の様々な表紙

が、私が個人的に購入したものですので、自由にページをめくつてみてください。「Gin: Kicida」の赤い印も読み取れると思います。中身をご覧のたゞくと、幕末という慌ただしく緊迫した時代の雰囲気がよみがえってくると思います。どんな内容の記事があるかというと、例えば第五篇の慶応四年四月二十五日には、新選組局長近藤勇処刑の記事がニュースとして出でます。

「今日平尾にて、官軍に生捕られたる近藤勇を死刑に行ひ、其首を京師に送る」と。京師



『横浜新報もしほ草』近藤勇処刑の記事

は京都のことですね。また、第十二篇にはヴァン・リードの名前で「當今日本の急務は、内乱ををさむるにあり」「日本人地圖を見て、其國の極小なるを知るべし」、第十三篇では「奥州よりきたりし人のものがたり」として、「ともかくも、はやくいくさがやまねば、百姓もこまる、職人もこまる、ほうずもこまる、やまぶしも、やくしやも、げいしやもこまる、商人がいちばんこまる、あゝこまつたものだ、はやくもとの太平にしてくださいまし。」と。私はこれらを書いているのは全部吟香なんだと思います。外国から日本の国を守るためには、一刻も早く戊辰戦争を收めなきやだめなんだと、吟香の切実な思いをさまざまな階級の人々に伝わるよう書いたのでしようね。こうして吟香は三ヶ月ほど『もしほ草』の編集に注力します。がしかし、気が多いものですから、生来移り気なんですね。今度は蒸気船を動かす事業などに夢中になつていく。今日は時間がないのでお話しできませんが、石油掘削や氷を作つて運ぶ事業など、さまざまに手を出しては成功・失敗を繰り返します。まさに今で言う起業家で、新たな事業を起こし、回していくのに忙しくなつて、新聞には関わつていられなくなつてしまします。吟香は慶応四年（一八六八）八月頃には、『もしほ草』の編集を離れたようです。

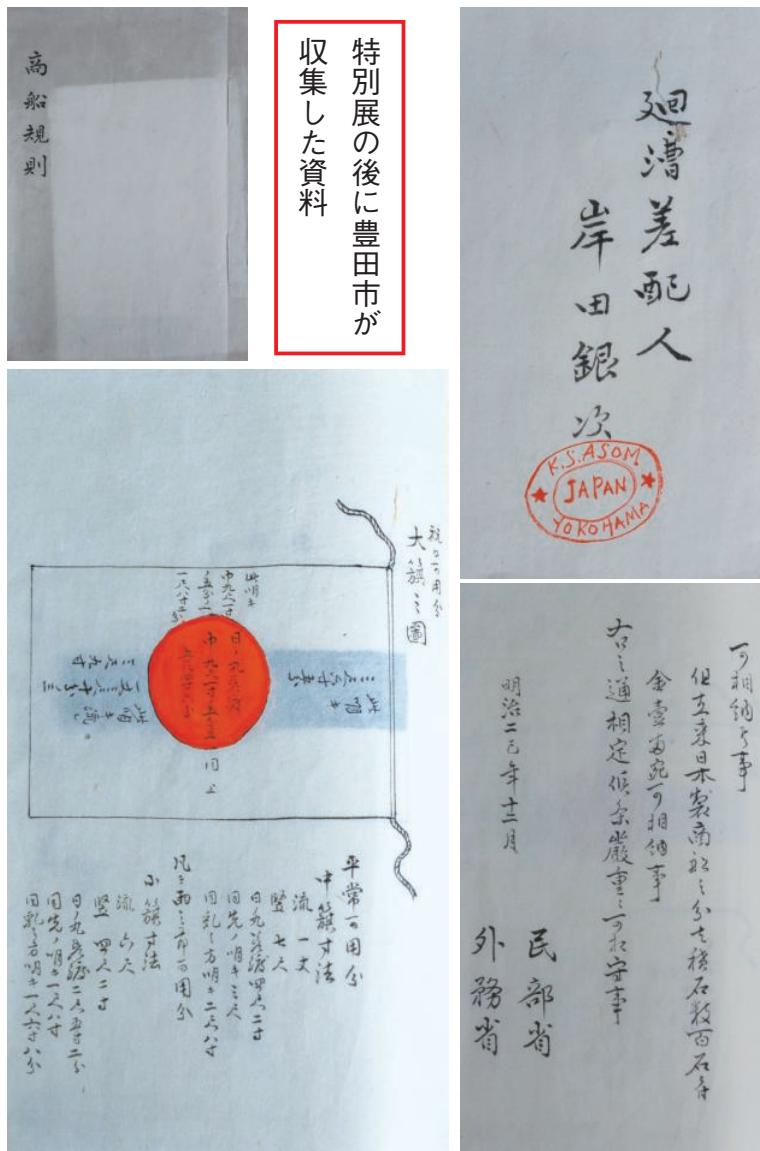
C. 渡航新聞のりあひばなし

吟香は稻川丸といふ蒸気船を手に入れて、江戸と横浜を結ぶ蒸気船の定期航路を開設しました。ところがただ船を動かしていたのではなく、けれどもというかやはり、物書きとしての血が騒いだのでしょうか。今度は『渡航新聞のりあひばなし』という新聞を刊行します。初編の書き出しは「新潟にてうちとりたる庄内の老臣石原金右衛門が懷中にありし書類のうつし」。なんだかわくわくしますよね。そして、官軍と対峙する奥羽越列藩同盟が、外交に活路を求めてプロシヤの領事官と接触していることや、庄内藩がエドワード・スネル、この人はプロシヤ出身の武器商人ですが、そこに武器・弾薬などを注文したときの書付などを紹介しています。そして最後には「続きは第二篇にて」とある。こ



『横浜往返寿古録』(部分)

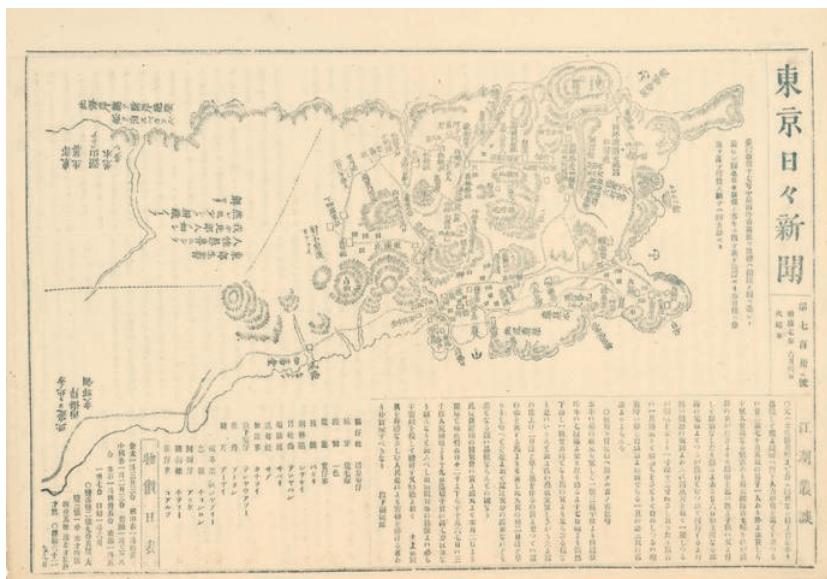
の新聞の表紙には「蒸気船待合所販売」とあるので、吟香はこれを自分が動かしてい　た稻川丸の待合所で販売してい　たんですね。船を待つ、あるいは船上で時間を持て余した人たちが、食い入るようにして記事を読む姿が目に浮かんできます。読む人をわくわくさせる、ある意味覗き見趣味的なその内容は、まさに現在の週刊誌に通じるものがあると思いませんか。幕末という時代にこんな仕掛けができるたり、文章が書けた人間が、吟香のほかにいたでしょうか。おそらくほとんどのなかつたと思います。ただしどこまでも吟香らしく、お楽しみの第二編は、ついに世には出なかつたようです。



『商船規則』公布前の吟香の写しと思われる

d. 東京日日新聞

この頃の吟香は、いろいろな事業を手がけては失敗を繰り返し、明治五年には品川・横浜間の鉄道開設を見越して稲川丸も売却してしまいます。そして、明治六年には日報社の『東京日日新聞』（現在の毎日新聞）に主筆として迎えられる。再び新聞の世界に舞い戻ってきたのですね。翌七年には台湾出兵がありました。日本軍初の海外派兵です。すかさず吟香は「新聞は国家の耳目なり」「見聞きするところあれば記録し、速やかに報知することを責任とする」と、社内で従軍記者派遣の必要性を説き



『東京日日新聞』明治7年6月30日

ました。従軍記者はヨーロッパでは当たり前でしたが、当時の日本にそんな概念はありません。他の記者たちはみな尻込みしてしまい、四〇歳の吟香が憤然として従軍を願い出ることになったのです。機密を尊ぶ軍部は当然嫌がるわけですが、吟香はそれを説き伏せてついて行つた。新聞社では唯一吟香だけです。当時すでに写真はありませんが、文章がうまい上に、絵が得意な吟香はうつてつけの存在でした。うちの息子は大丈夫なのかと不安な親たち、今か今かと情報を待つ国民に、唯一戦況を伝



『東京日日新聞』明治7年8月5日

えた『東京日日新聞』は売れに売れたと言います。吟香の記事を少し紹介してみましょう。「まづ丈夫デハ居ルケレドモ中々クルシヒ、大概ノ所デハ是程ノ苦シミハ有ルマイ、喰フ物ハナシ、クヘバ高シ、ウマクハなし、アツイアツイア、苦シイ」と。従軍はそれはそれは大変だったと思いますが、吟香らしい率直な気持



『東京日日新聞』台湾信報 明治7年6月12日



『東京日日新聞』台湾手稿 明治7年8月5日



『東京日々新聞』錦絵



『東京第一名所銀座通煉瓦之図』部分

ちが書かれています。台湾でただ一人奮闘した新聞記者として、また台湾での様子が錦絵に描かれたりして、吟香は一躍有名人になつていきました。

『東京日日新聞』は、「論説（政治面）の桜痴」と「雑報（社会面）の吟香」という二枚看板を擁し、新聞社として確たる地位を築いていきます。明治八年一月三日の吟香の記事。「あけぼの新聞ハ昨日から売り出すと申す引札が廻ツたゆえ、薬研堀へ買ひに往と、ヘイ本局が駿河台でまだ刷り上て参りませぬ。大かた今晚までにハ出来上がりませうと思ひます。それじやアゆうぼの新聞と直に名を替へたのか子。イエ日報社も前月の初めごろハ配達が翌日に成ツた事があつたけれど東京昨日新聞とも改名しなかつたそうで御座ります。口のへらねエ男だ。口の減らぬが新聞の種さ、口が減ると売れが減り升」と。『あけぼの新聞』は末広鉄腸が編集長。日報社は『東京日日新聞』の会社です。吟香は得意の話し言葉の口語体を駆使して、自由自在に語っています。「御座ります」のセリフは、吟香流の表現として一世を風靡したそうです。

そんな中、明治八年六月に讒謗律ざんぱうりつと新聞紙条例という言論規制法が公布されます。これは政府による新聞弾圧で、他人を中傷誹謗する著作物などを販売したものを罰する法律でした。各紙の編集長が次々と投獄されていく中、吟香はこんな

記事を出します。「私ハ元来臆病者で五座りますから、禁獄だの罰金だのが怖くツて／＼毎日びく／＼して居ますから、今日から編輯長を免職いたしまして出版人に成りました。其替り極よい編集長を頼みましたから是からハ又だん／＼面白いことを澤山に申し上ませう、併し私も手伝ひますから何とぞ相替らず御評判をお願ひ申し上ます」。

何とも無責任な宣言ですが、これが挙母藩を脱藩したとき以来の吟香の処世術なんですね。真っ向からは立ち向かわない、そしてままよの精神。少しどけたこの文章も、誠に吟香らしい。その後も吟香はフリーライター的に『東京日日新聞』に闊りました。

事実を分かりやすく、時にユーモア怖くツて／＼毎日びく／＼して居ますから今日から編輯長を免職いさ／＼まして出版人よ成りました其替り極よい文章は、大いに人輯編長と頼みましたから是からハ又だん／＼面白いとを文章は、大いに人氣を博しました。

澤山よ申し上ませう併し私も手伝ひますの／＼何とぞ相替

らず御評判をお願ひ申し上ます 前編輯長岸田吟香再拜

編集長を辞す挨拶

(四) 樂善堂とその広告戦略

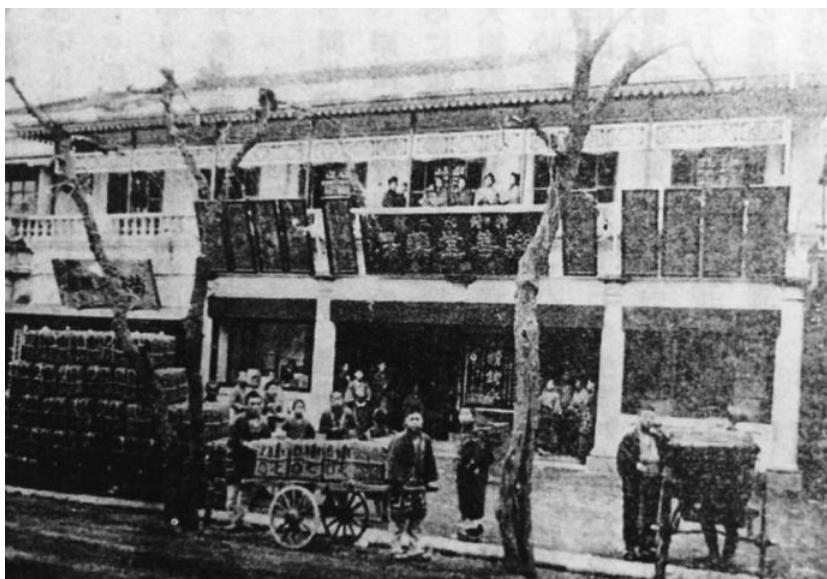
吟香は日報社のあつた銀座煉瓦街に「樂善堂」という店を構えます。今でいう薬局ですね。もともとヘボンの医療の手伝いをしていましたので、そこで目薬の作り方も覚えていて、精錡水という日本初の液体目薬を「ヘボン博士直伝」と銘打つて販売します。一階で薬と書籍・文房具類を販売し、二階には吟香の書斎や食堂などがありました。吟香は七男七女の子だくさんで、一人一人に乳母が付いたと言います。この写真の一階に並ぶ人々は、吟香の子供と乳母たちだと思います。この中に岸田劉生も写っているのかもしれませんね。精錡水をはじめとする樂善堂の薬は全国に販路を広げていきました。例えば市内の梅坪で太田七重郎が営んでいた大弼堂や竹生のウメムラ薬局でも販売されていました。



精錡水の瓶



『東京商工博覧絵』明治18年より



明治30年頃の楽善堂



『目薬 精錠水』 大堀堂引札



大堀堂跡



「海運橋 第一銀行雪中」

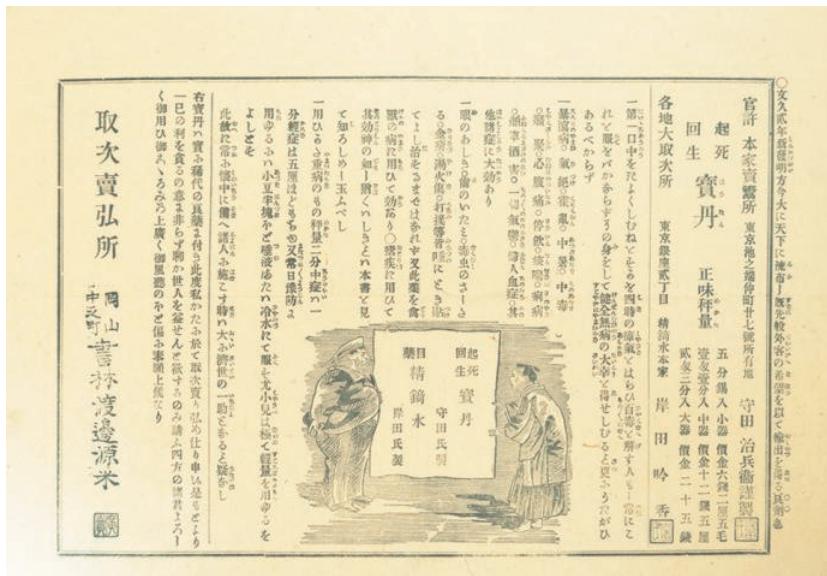
また、「海運橋 第一銀行雪中」は、最後の浮世絵師と呼ばれた小林清親の有名な錦絵です。第一国立銀行は渋沢栄一が明治6年に開業した日本最古の銀行で、和洋折衷の建物は東京の新名所となりました。手前の女性が持つ番傘には、「銀座」「岸田」と書かれています。この素材が揃うと、明治の人たちは自然に、銀座に店を構えている吟香を思い浮かべる。明治の頃の吟香は、世間でそれだけの存在感を持っていたということです。



樂善堂の引札



樂善堂の引札



「宝丹」引札



吟香の姿が入った引札廣告

また、吟香は自分を売り込むことに秀でていました。自分が関わった新聞でも、広告を盛んにかつ巧みに打つ。自分をデフォルメ、キャラクター化している、今の言葉で言うとアイコン化しているんですね。また、この引札、分かりやすく言うとチラシを見てください。楽善堂で販売する薬の効能書きを読む人物と

許官 樂善堂賣藥廣告 岸田吟香

清めぐすり

精金水

定價六錢二厘五毛

樂善堂三堂本
本家東京岸田吟香詩詞
穏鎮溜丸
補養丸
飲
定價六錢
りういん 三種
つうじ乃葉
同 二錢

「我輩はもう居るダ
矢張びん印だらうる紹介
日々する程の物でも
只えん上に出来
併し新しく、変更くせせう

A black and white illustration of a man in a traditional Japanese outfit being struck on the head with a wooden board. He is shouting in pain. A sword is visible in the background. Japanese text is written above the man's head.

岸田吟香拜啓

私と此たび 御巡幸の御供ひなし お付で
御道筋ふ近く 精錦水三葉の御得意様方へ

一 御挨拶
ほ 立寄りやす

依て此なん新聞を以て皆様へは伝を下さい
上げ奉りは悪からず思召し被下は様を偏る
奉希上ひ謹言 東京樂善堂ニテ

東京樂善堂

ふし

新年の御祝儀を申上ます
敬社新聞の春題諸彦を始めとして昨年
悲情を擡げたる奥羽諸州の諸君と北陸東
洋水三葉を御取次ぎ下さる御得意様
方との外かねて私ども存じ下さる人
々へ新聞を以て聊か拜賀の意を表し
奉ります恭祝

吟香の姿が入った新聞廣告



楽善堂の引札

ともに、この引札を見る私たちも自然に読んでしまいますよね。思わず「上手い」と声が出てします。吟香は広告社の代表を務め、日本広告株式会社、現在の電通が開業したときの相談役にもなっています。

東京の三宅坂交差点、ここには三河の田原藩三宅家、豊田市の梅坪出身ですが、その上屋敷があつた場所で、三宅坂の地名の由来となっています。ちなみに坂を上がつたところにある国立劇場の場所が挙母藩内藤家の上屋敷で、内藤家と三宅家の上屋敷は並んでいました。余談が長くなりましたが、三宅坂交差点の横に電通が創立五〇年を記念して、広告先覚者を顕彰するために昭和二十五年に立てた平和の群像があります。後方にあるのは最高裁判所ですが、平和の群像の碑文には、広告功労者の二人目に吟香の名前が刻まれています。東京に出かけたらぜひひご覧ください。

吟香はそのほかにも、目の見えない人たちのために盲学校「訓盲院」を設立したり、中国に渡つて精錡水や袖珍本と呼ばれる小型の本を販売したり、アヘン撲滅のための活動を熱心に行いました。その他にも吟香の活動は枚挙にいとまがありません。



平和の群像の碑文



平和の群像（東京都千代田区）



訓育院

今曉近火之節諸彦之御見舞ヲ蒙り忽卒之際
御姓名ヲ承リ洩候哉モ難計因テ茲ニ拜謝ス

十三年一月十九日 神田區東糸屋町四十七番地 前橋爲三郎



精鑄水を中国に売り広めに行く旨を伝える新聞廣告



袖珍本

三. 吟香から生まれたもの、そして晩年

(一)

明治初期のジャーナリズムを支えた二人目の挙母藩士 斎木環（貴彦）

少し話が脱線しますが、私がここ数年気にしている人に「斎木環」あるいは「貴彦」という挙母藩士がいます。環の父の斎は、幕末に挙母藩の江戸藩邸最後の留守役を勤めた重臣です。『七州城沿革小史』を読みますと、吟香が東京日日新聞の主筆となると、「挙母ニアル旧門人斎木環ヲ招キ編集ヲ補助セシム」と書かれています。斎木環は「夙ニ文學ヲ藩儒岸田吟香ニ修メ」「後出テ、新潟新聞社の編輯長タリ」とも記されています。おそらく斎木環は、江戸藩邸で吟香の教えを受けたのでしょう。ところが、明治十年四月から発行された『新潟新聞』の歴史を調べていくと、初代編集長は斎木「貴彦」という名前で「環」ではないんですね。斎木貴彦を調べていくと『日新真事誌』という、それこそ『東京日日新聞』と並ぶ有名な大手新聞で、有名な編集長であつたイギリス人ブラックのあと、明治八年一月四日～十二月五日に編集長の役割を担つたりしています。しかし、挙母の資料はみな斎木「環」で、「貴彦」とは誰一人書いていないんですね。この二人は果たして同一人物なのか。もしそうだとすれば、この斎木貴彦と吟香は間違いなく関係が強いはずです。

新真事誌

明治八年十二月五日 第二百六十五號

本社廣告

晴

塞國計正午六十二度

本日辛丑
十二時二十四分 満 沙

未時發兌スル所ノ日新真事誌ハ今止ナ得

一洋銀

米英金

計米英金

荷物

學生姓名

或人

尼介

男女

洋銀

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

日

年

月

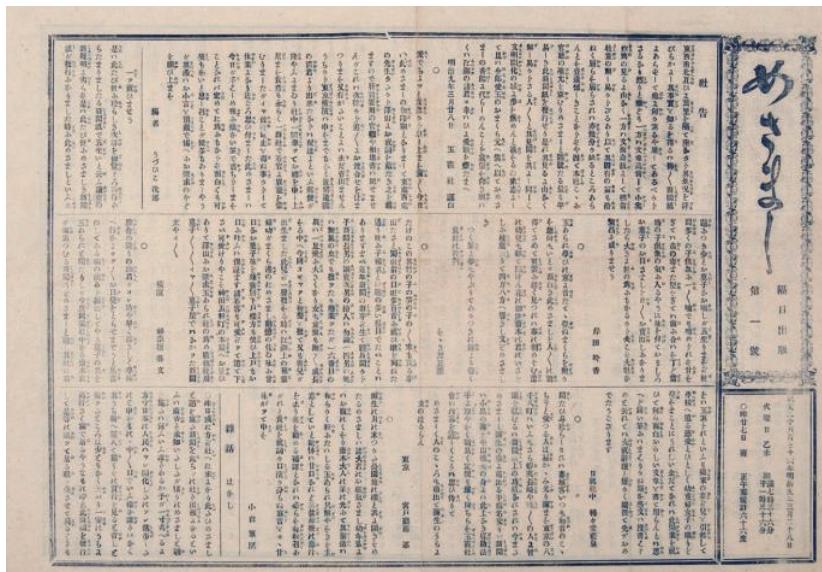
日

年

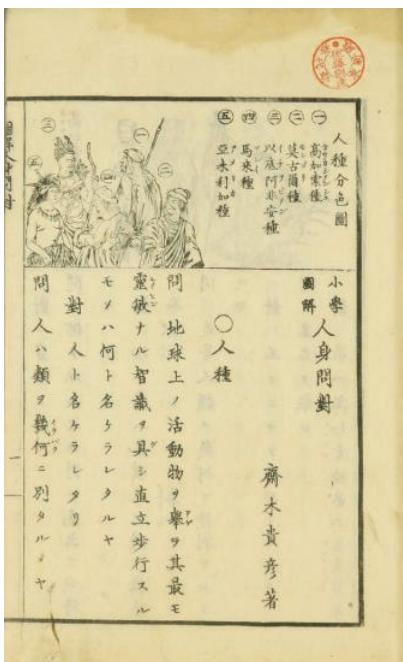
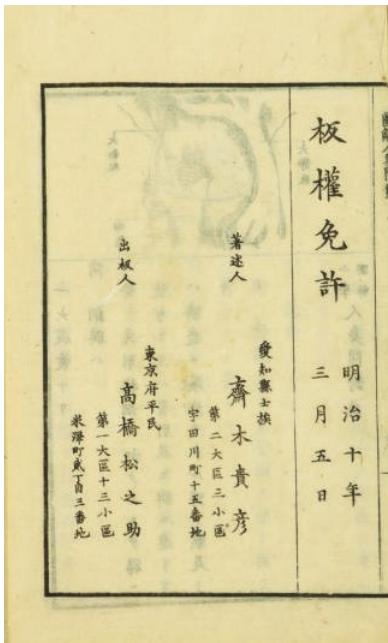
月

日

実は明治九年に『めさまし』という小新聞、小新聞とは庶民向けに娯楽記事を主体としたもので、それを斎木貴彦が発刊したことは知っていたのですが、最近ようやくその一号の内容を確認することができました。貴彦は「うづひこ」と読ませていたようですが、斎木貴彦のあいさつの後に、「一つ祝いましょう」と書いているのはなんと岸田吟香その人でした。この強い結びつきから、斎木貴彦は環と同一人物である可能性がうんと高まりました。また、『新潟新聞』から続く『新潟日報』の論説編集委員長で、新聞の歴史の研究者でもある森沢真理さんから、斎木貴彦が出版した図書のことを教えてもらいました。明治十年三月刊行の『小学図解人身問対』という人の体を分かりやすく説明した本です。この本の奥付には、斎木の肩書が「愛知県士族」と記されているんですね。この時代は、吟香のように脱藩してしまって武士でなかつた人は「平民」、武士だった人の多くは「士族」とされました。「挙母県士族」と書かれていればストライクなのですが、明治十年の時点に挙母県はすでになく愛知県としてまとめられているので、残念ながらこれ以上は絞り込めないのですが、先ほどの吟香との関係性を含めても、東京・新潟で活躍した斎木貴彦は、挙母藩の斎木環が貴彦と改名したと考えて間違いないと思います。



『めさまし』第一号



『小圖解人身問對』

斎木貴彦は明治十年に『新潟新聞』の初代編集長に招かれたわけですが、この新聞は、明治十二年には後に「憲政の神様」と呼ばれる尾崎行雄が主筆となるなど、地方新聞の雄として名を馳せていました。『新潟日報』は、現在でも県下普及率五割を超える有力地方紙です。吟香の弟子である斎木環改め貴彦が、新潟の歴史に確實に足跡を残した事実を、私は大変うれしく思います。

ちなみに、挙母の歴史書として欠かせない『七州城沿革小史』を著した渡辺善次は斎木環に学んでいて、明治十年代頃には『愛岐日報』という新聞社の記者でもありました。吟香を起点とする挙母藩士のジャーナリスト列伝みたいなものが、いか形にできると良いなど考えています。

(二)

晩年の吟香と受け継がれしもの

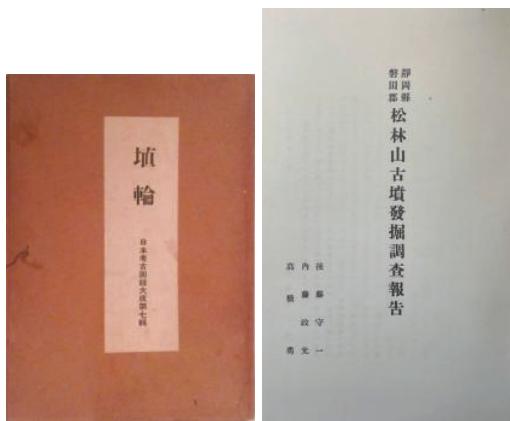
その渡辺善次が記した『七州城沿革小史』にはこんな記事もあります。「吟香先生晩年世塵を忌避し、旧友知己の訪問するものあるも、多くは会見を謝絶せり。子爵内藤政共公外国帰朝後、先生を訪問せしに、快く会見せられしは、要するに旧恩を忘れざるが為めなりしそ。内藤政共公旧来藻（挙母）藩主なり」と。政共公は、最後の挙母藩主となつた七代文成公から家督相続し、工部大学校（東京大学工学部

の前身）で造船を学び、明治十四年（一八八二）からイギリス、スコットランドのグラスゴウ大学に留学されました。これはお金があつたからでは決してなく、この分野では第二回目の留学生となる二人のうちの一人で、非常に優秀な人物でした。明治十四・十五年はグラスゴウ・ネビルソン造船所に滞在し、その後フランス・ドイツ・アメリカ等の工場を視察して、明治十八年に帰国しました。在英中の明治十七年に子爵を授けられ、帰朝後の明治十九年には海軍大技士、明治二十三年には貴族院議員となっています。吟香はこの政共公と会っていたわけで、自分の母時代を思い出していたことでしょうね。

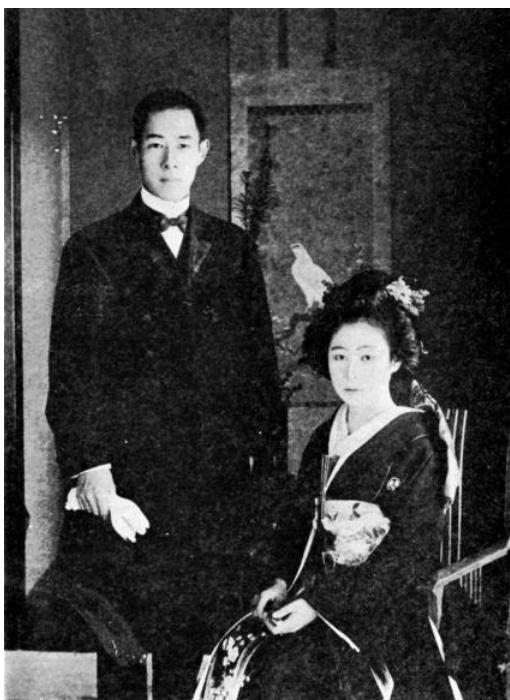
また少し脱線しますが、先ほどの政共公の長男の政光公は明治二十四年の生まれで、父の死去に伴いわずか一歳で家督相続。東京帝国大学文学部国史学科卒業後には、帝室博物館学芸委員などを歴任しました。考古学に造詣が深く、数多くの古墳の調査などに参加して、たくさんの著作を残しています。続く内藤政恒公は、現



内藤政恒公肖像



政光公の著作



内藤政光公写真

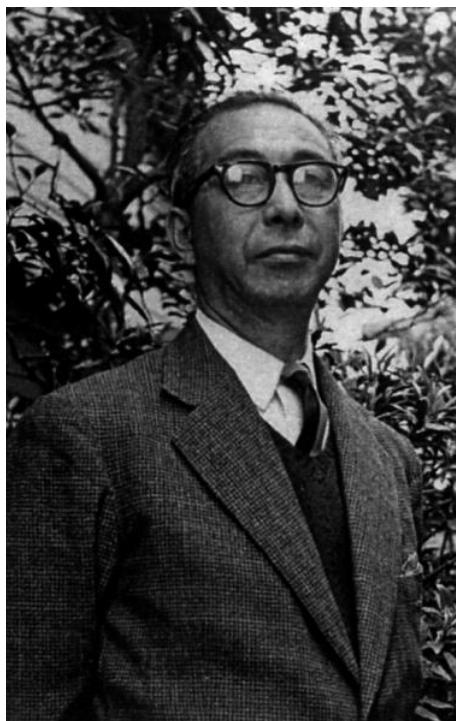
在のご当主政武様のお父様ですが、日向延岡の内藤本家から挙母内藤家へ大正十三年に養子に入られました。東北大学で歴史を学んだ政恒公もまた考古学者として著名で、宮城県の多賀城や古瓦・硯などの研究で数多くの著作を残され、玉川大学教授でもありました。考古学を本職としている自分にとって、我々のお殿様がこうした素晴らしい業績を上げられていることを大変誇らしく思います。

さて、話を戻しますと、吟香は日露戦争が始まった明治三十七年に体調を崩し、翌年亡くなりました。享年七十二歳。葬儀は遺言によつてキリスト教方式で行われました。葬儀には伊藤博文、板垣退助、榎本武揚ら大勢の人たちが参列したと言います。お墓は東京の谷中墓地にあり、近くには渋沢栄一の墓もあります。

吟香の七周忌にあたる明治四十五年には、吟香が大好きだった桜が咲く隅田河畔に、高さおよそ三メートルの大きな記念碑が建てられました。東京大空襲の焼夷弾

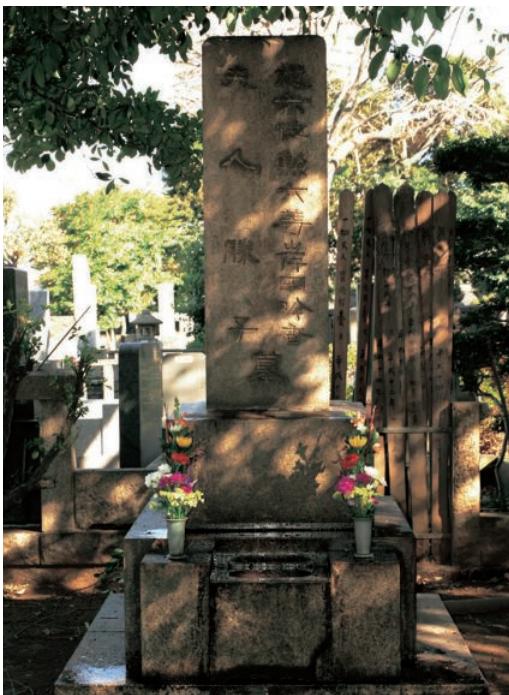


政恒公の著作



内藤政恒公写真

の爪痕が残されていますが、現在も隅田川神社の境内に残されています。寄附者は渋沢栄一などの名前もあります。碑文の撰文は、昌平坂学問所以来の友人で漢学者であつた三島中洲。「挙母侯に仕えて侍読と為る」という記述も見つけられます。侍讀は学問を教授する学者という意味ですね。最後の文章は意訳すると、「維新とともに始まつたさまざまな事業は、吟香が先見の明をもつて始めては失敗を繰り返した。それがきっかけとなつて真似する人たちが続々と現れては競い、やがて成功を見た。吟香はその栄誉の最初となることにはこだわらなかつた。」となり、まさに吟香の人生を言い当てる氣がします。



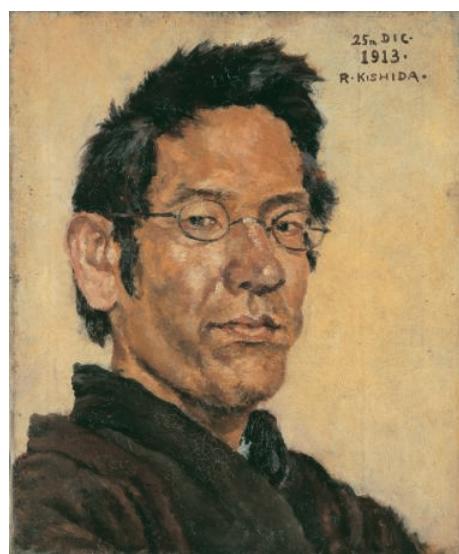
岸田吟香の墓（東京都台東区）



隅田川神社にある記念碑（東京都墨田区）

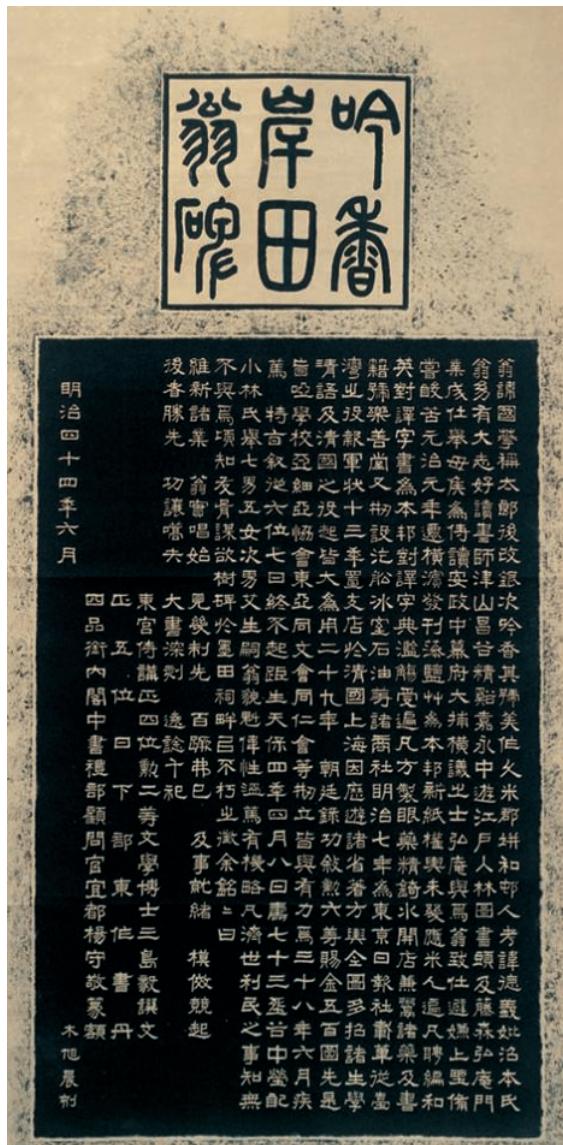


「麗子洋装之図（青果持テル）」



「自画像」（いずれも豊田市美術館蔵）

また、吟香の子供たちについても触れておきましょう。吟香は明治二年、三六歳の時に小林勝子一四歳と結婚。四〇歳の時に長男・銀次郎が誕生し、以後、六六歳になるまで七男七女に恵まれました。四男・劉生は日本近代美術史上屈指の洋画家に、五男・辰也は宝塚少女歌劇団の演出家になりました。劉生は画家としての評価



記念碑の碑文拓本

が頭抜けていますが、美術に関する批評・エッセイも数多く残していて、吟香譲りの几帳面な日記、『劉生絵日記』などは特に有名です。劉生の絵は、東京国立博物館所蔵の有名な「麗子像」が重要文化財になっています。豊田市美術館にも、自画像や麗子像の水彩画など、劉生の素晴らしい作品が五点収蔵されています。

(三) 「岸田吟香」とは

そろそろ時間が無くなつてきましたので、まとめに入りましょう。実に多彩な吟香の生き方を無理やりまとめると、「常に庶民の目線で物事を見つめる」ということになるのではないでしようか。八百屋の荷担ぎ、左官の助手、湯屋の三助、女郎屋の主人など、若き日の吟香は、常に庶民と共に暮らしてきました。分かりやすい辞書や新聞記事、国民に戦況を伝えるための台湾従軍、見る人の心を動かす広告、売薬や訓盲院の設立。いずれも庶民の目線に立つからこそできたこと、生まれたことだと思います。

そして、同時代の人たちが気付かなかつた新たな価値や意義を見出す。日本初の本格的な和英辞書の編さん、日本初の民間新聞の発行、日本初の従軍記者、日本初の液体目薬の販売。他にも石油掘削、製氷、蒸気船定期航路の開拓、盲人教育、日

中交流など、吟香が手がけた事柄は、現代においてもなお重要であることにあらためて驚かされます。さらに吟香には、そのアイデアを実現に移す桁外の行動力がありました。これこそ「傑人」という名にふさわしい。現代で言えば、例えばアップルを作り、パソコンやスマートフォンで世の中を劇的に変えたステイリーブ・ジョブズなどと同じです。

では、吟香を突き動かしていたものは何か。吟香の日記には、繰り返し「ままよ」という言葉が出てきます。例えば「どうでもまゝよのぎんさんがまゝよまゝよではんとしあまり」「まゝよの吟香、来年のくれハどこでくらすか



吟香筆「ままよ」

wakarimasen」「ま、よま、よではんとしハくらすか、おいらハもう六七年ま、よだ。どうぞ一生ま、よでくらしたいもんだ」と。武士に嫌気が差した吟香は、明治に入つても政治家・官僚などの体制側とは常に距離を置いていました。政治的にではなく、常に庶民の目線で社会を見つめる。そして、新たな価値や意義を見出す。「議論より行動」「時機を見た決断と桁外れの行動力」「やると決めたら常に先頭を走る」。そうした吟香の姿勢は、若い頃から終始一貫していだように見える。その根底にあつたのは、明治の人のエネルギーと理想を持った「ままよ」の心意気であつたと思います。

○ おわりに

吟香の生きた時代は、文明開化という大きなうねりの中にありました。先ほど見ました小林清親の番傘をさした女性の錦絵にあつたように、また田中正幅が『西加茂郡誌』の中で、「すなわち今の岸田吟香なり」と驚きをもつて記しているように、明治の頃の吟香は、誰もが知る傑人だつた。ところが今では、息子の劉生は知られていても、その偉大なる父であつた吟香のことはすっかり忘れられています。それはなぜでしょうか。吟香は政治家になつたわけではない、例えば大隈重信や岩崎弥太郎のように大学や財閥

を作ったわけでもなく、世間に形や記録として残るものを持つたわけでもありません。大河ドラマに登場した実業家の渋沢栄一、吟香の七つ年下ですが、農民から武士になつて様々な事業に関わった点では吟香に少し近いかもしませんが、渋沢は公の姿勢も強く持つていて、生涯一民間人を貫いた吟香とは大きく目線が異なると思います。

吟香はいわば肩書きのない立場で、幕末から明治というエネルギー・シユな時代に大きな輝きを放つた。こうした「時代性」を持つた輝きは、次第に忘れられていくんですね。あの坂本龍馬ですら、かつてはそうでした。しかし、本日見ていただいたように、吟香が起こした時代の波は、確実に現代の私たちにも届いている。私たちはその人生を掘り起こし、誠にあっぱれな生涯を語り継いでいく必要があるのだと。そして、この吟香が挙母にいた、崇化館で教えていたという事実を、私は大変誇らしく思います。挙母藩士やその子供達にはほかにも、例えばイギリスで活躍した水彩画家の牧野義雄、奈良東大寺で通し矢日本一の記録を打ち立て、後に新選組幹部となつた安藤早太郎、挙母二万石に過ぎたるものどうたわれた剣豪海老名三平と多彩な才能を開花させたその子供たちなど、興味深い人たちがたくさんいます。これは教育に熱心に取り組んだ挙母藩内藤家があつたからこそだと思います。こうした私たちの先人の足跡を少しづつ掘り起こし、今後ともふるさと自慢を増やしながら、ふるさとの豊かな歴史や文化を育んできた底力が

この地にあつたということを、これからも追い続けていきたいと思います。

来年の令和六年四月には、挙母藩内藤家の二の丸がつくられる予定であった七州台に、いよいよ豊田市博物館が開館します。その翌年の令和七年は吟香の没後一二〇年に当たり、それにあわせて博物館で吟香の展覧会を予定しています。引き続き皆さまのご支援をいただければ幸いです。長時間にわたり、ご清聴ありがとうございました。

【遺記】

吟香については自分の「ライフワークの一つ」と思ひ、仕事の傍ら少しづつ調べていますが、まだまだ分からぬじとばかりです。ここに地元の皆さんに是非教えていただきたいことを記しておきます。

■岸田吟香関係資料をお持ちの方はお知りせぐださう。

■16ページに記した「笠井紀一郎」はどうなたか。

■宮本常一『庶民の旅』(一九七〇)に挙母藩の記述がある。「あるく・ある・せく 文武修業の旅」に、「挙母藩では入門する師家の束修・謝儀・旅費等を給したり、修業料として米一人口又は二人口を給し」とある。吟香に二口俸を与える記述と合致するが、宮本常一のこの記

述はどじから引かれたものなのか。

■66ページの斎木環など輩出した斎木家のお墓はどじにあるのか。斎木環（貴彦）は明治十一年六月に新潟新聞を退職するが、それ以降の消息が不明。

■举母藩剣術師範であった海老名三平（四代）の長男・弥雄太郎は、新潟県長岡市で弁護士となつたが、その後の長岡での海老名家の消息が不明。弥雄太郎の長男・文雄は洋画家で、第二回「科賞」を受賞して一世を風靡。大正十二年渡仏、昭和十四年に帰国し、戦後初の海外演劇「ツーロン花」の衣装考証を担当。三平の次男・龍四は日本初の耐火煉瓦の特許を取得するなど、品川白煉瓦の草創期を支えた。三男・明四は洋画家で、若き日に志賀重昂『日本風景論』の挿画を担当するなどし、東京美術学校（現・東京芸術大学）を卒業。松岡壽などに師事し、後年は東北大学地質学教室に画工として昭和初期まで勤務。これら海老名家に関わる絵画作品や資料がどじかに残されていないか。

などです。情報や何かヒントなどあればどじなんじで、豊田市博物館（0565-32-6512）もどじ是非どじ一報ください。

あとがき

先生に講演をお願いして、実は三年目となつて、実現した講演でした。コロナ禍により総会の開催も儘ならず時間が経過してしまいました。

先生は岸田吟香の応援団長として吟香の業績を広く皆さんに広めたいとの志も高く、今回の講演も快く引き受けて頂き、ありがとうございました。

令和五年四月には、美術・博物室長となられ、特に建設中の博物館の中心となり、超多忙の中で講演をして頂き、この冊子の原稿も整えて頂き、お礼のしようも無いほどお世話になりました。

専門の分野とは離れた分野に幅を広げて頂き大変ありがとうございました。

先生には今後ともご指導をお願いし、これからも更なるご活躍を祈念いたします。

（杉山 允朗）

傑人 岸田吟香 拳母より現る

森

泰通

講演
発行
令和六年七月三十一日

編集発行

内藤学文公顕彰会

事務局 小坂区民会館内

豊田市小坂町

七一十六一五

印

刷

三河印刷株式会社

